

SOS ニュース

冬の旅人の話

昔々、雪の降る寒い日のお話しです。

一人の旅人が馬に乗って夕暮れ時の峠にさしかかりました。雪が積もり寒さも厳しくなって、馬も疲れた様子でした。旅人は“この峠を越えたらば、何処かで一晩の宿をお願いしよう”と考えました。

そして馬を励ましつつ、やっと峠を上り詰めました。旅人は峠の頂上から遙か遠くの景色を眺めました。峠を下った先には、広々とした野原が横たわっていて、一面真っ白な雪景色でした。

周囲は夕暮れの闇に包まれていていましたが、野原の先の黒く見える森の入り口あたりに、かすかな明かりが見えました。旅人は“やれ助かった、あの家の人をお願いしてみよう”と決めて、馬をゆっくりと歩ませ、雪道を下っていきました。

やがて野原の端に降り立った馬上の旅人は、明かりを目指してまっすぐに平らな雪の野原に馬を歩ませていきました。迷うこともなく、雪囲いのある一軒の茅ぶき屋根の家の大戸の前に着きました。

馬を下りた旅人は、庭の立木に馬をつなぎ、戸を叩いて云いました。

“旅の者です、一晩の宿をお願いできないでしょうか？”と頼みました。

そこへ出てきた老翁は、雪をかぶって寒さに凍える男を見て、いいました。

“早く入って囲炉裏の側に座りなさい。寒かったでしょう、お茶を差し上げましょう”

旅人は、老婆の差し出した茶碗の茶を一口飲んで、ほっと一息ついて安心しました。

“ところで、あんたはどこから来ましたか？”と老翁は尋ねました。

旅人は“馬に乗って峠からの上から、この家の前の広い野原をまっすぐ横切ってきました”と答えました。

それを聞いた老翁は驚いた顔して“まあよくご無事で着かれましたな”と叫ぶようにいいました。旅人は怪訝な思いで、“平らな野原でしたから、馬も楽に歩いてくれました”と答えました。

すると老翁がいいました。“貴方は幸運な人だ、あそこは野原ではなく底なしの沼なのです、今は一面に氷が張っているので無事に渡れたのです、もし氷が薄いところにぶつかったらば、馬もろともに底なしの泥沼にはまってしまったところでしょう”と。

旅人は自分の運の良かったことを天に感謝しながら、それとともに自分の行動について、

幾つかのことに気づきました。

自分の思い込み(ここは野原だ)によって、これが当たり前だと思う行動(まっすぐ横切る)をとっていたのだということに気づきました。また、その時の周囲の環境や状況(寒い夕暮れの中にいた)に影響されたこと、自分の直接の経験や考えでないこと(実際は馬が歩いていた)を、あたかも自分で経験し、考えたかのようなつもりで、自分の考えとして取り入れて行動したのだということ、などを認識しました。

旅人は“自分の行動が如何に主観に基づいているのか、他人の考えを自分の考えとして取り入れていることに気づかない、その危うさを自覚しました”とさ。

(昔読んだたとえ話の紹介)

心理部会 長谷川 宜志